

# 生徒の疑問を活かした授業

——『史記』項羽本紀の場合——

渡 辺 雅 之

## 一 はじめに

おそらくどの高校でも、新指導要領によって、各教科での単位分捕り合戦が演じられたことであろう。学校五日制を想定していない新指導要領下では指導要領通りに各教科の単位数を設定したのでは、月2回の土曜休業に対応できる無理のない教育課程は編成できない。いきおい入試に係の少ない教科にしわ寄せがもたらされることになる。

国語の中では真っ先に漢文が槍玉にあがるはずである。入試科目からはずされ、しかも国語の教師の中にも漢文を教えることを嫌う者が多く、また生徒も漢字ばかりが並んでいる文章である漢文を嫌うという状況を考えると、漢文が排除されるのは当然という感もある。

このような危機的状況のもとでの漢文の授業は何らかの工夫を迫られているはずである。

講義式の読んで解釈字のごとしという授業では生徒はついてこないであろう。勿論、講義式の授業も一方では必要であろうが、そればかりでは生徒は食傷してしまいうであろう。

そこで、何か生徒の漢文に対する興味を喚起する方法は、ということまで考えたのが今回取り上げる授業である。

数年間、この授業を行ってみて、生徒の反応は意外とよいことがわかった。普段の解釈中心の授業ではないという目新しさが必要なのかもしれない。

## 二 この授業のねらい

漢文が読めて、解釈できるようにすることだけが漢文の授業の目的であるのだろうか。解釈のみに時間をとられて、真の漢文の面白みを殺しているのではないのか。日々

教室で生徒と授業を行っていて、疑問に感じた点である。

たまには、解釈を行わず、別な角度から漢文の授業ができないか。また、一方通行の授業ではなく生徒を巻き込んだ活気ある授業が展開できないものか。さらに、授業中あるいは、授業後に生徒から出される質問の中には、意外と重要な問題をはらんでいたり、授業者が舌を巻くような高度なものがあったりする。この生徒からの疑問を授業に活かさないものか。

以上のことから今回の授業計画を思い付いたのである。

ねらいをまとめてみる。

- 1 生徒を積極的に授業に参加させる。
- 2 疑問に思った点を疑問のままにさせない。
- 3 その教材を深読みする経験を持たせる。

### 三 項羽本紀の授業

以下、項羽本紀の授業について説明する。配当授業時数は十四時間を想定している。

- 1 先ず、事前の予習として、夏休みみの課題に、司馬遼太郎『項羽と劉邦』を読むことを義務づけた。なお、補助資料として、横山光輝の漫画を読むことも勧めた。
- 2 実際の授業の第一時限と第三時限を用いて、「項羽本

紀」の「鴻門之会」と「四面楚歌」（昭和51年発行、大修館書店教科書、精選高等漢文全一乙）をプリントしたものと、「項羽本紀」すべての口語訳（渡辺の訳したもの）とを配布し、生徒に用紙を配布し、疑問点を記入させ提出させる。

- 3 生徒からの疑問点をまとめてプリントにして配布。その際、生徒の疑問を活かそうということで一人の生徒につき、最低一つは、つまらぬ疑問と思われるものでも取り上げた。（今回の疑問箇所からは除いてある）

- 4 その日に行う予定の箇所について、まず範読後、全員に一文ずつ後について読ませる。その際、重要句形などについては（生徒には句形の用例をパターンごとにまとめたプリントを持たせてある）、重点的に解説する。

- 5 プリントの疑問点だけを授業で取り上げて、生徒にその疑問箇所を還元して吟味・議論させる。なお、解釈は口語訳のプリントを配布してあるので省略する。

- 6 生徒の意見を取り上げて、可否を皆で吟味しつつ、授業者が補足して結論を出し、授業を進めていく。ただし、次に掲げる疑問点をすべて吟味することは不可能なので、重要でないものは生徒に解答を言わせるか、教授者で答えを与えてしまう。

なお、本校では一年次では漢文を行わず、二年次に二單位を行うというカリキュラムを組んでいる。

#### 四 生徒からの疑問

生徒に提出させた疑問点をまとめたものが次の間である。ただし、本来のものは生徒を授業に引きつける意味もあって、最低一人一つの疑問を取り上げたので、もっと数は多い。ここでは、わかりきった事項の疑問あるいは、愚問に類するものは省略した。

また、後の考察のため、便宜的に疑問点を1 表現に関する疑問、2 内容に関する疑問、3 時代背景や中国文法に関する疑問、の三つに分類して掲げた。

〔表現に関する疑問〕

問 「阮秦卒二十余万人」とあるが、そんなに大きい穴があったのか。

問 途中で「項羽」から「項王」と言い方が変わっているのは何故か。

問 「人方為刀俎、我為魚肉」の意味がよくわからないが。

問 「火三月不滅」で、実際にこんなことがあるのか。

問 「人或」と「説者」とは同一人物か、それとも別人か。

問 「天之亡我、非戦之罪也」の意味がよく取れないが。

問 「殺数十百人」とあるが、一人でこんなに殺せたのか。

問 「項王笑曰」とあるが、この「笑い」はどういう笑いか。

問 「且籍与江东子弟八千人」で、「籍」と言って、「吾」や「我」を用いないのはなぜか。

〔内容に関する疑問〕

問 「有兵守関、不得入」とあるが、どこの兵か。また、なぜ通さなかったのか。さらに、項羽ほどの大軍を擁する者がなぜ通れなかったのか。

問 「沛公已破咸陽」で沛公は結果が予想できたろうに、なぜ先に破ったのか。また、何故沛公が咸陽を破ると不都合なのか。さらに、当陽君だと簡単に破れたのは何故か。

問 二箇所ある「項羽大怒」で、それぞれ項羽は何故怒っているのか。

問 「左司馬曹無傷」はどういう得があって密告したのか。

問 「使子嬰為相」とは具体的にはどういう意味なのか。

問 「貪於財貨好美姫。今入関財物無所取、婦女無所幸」というのは事実なのか。曹無傷の発言と矛盾するのは、どちらが正しいのか。

問 「此其志不在小」とあるが、なぜそんなことがわかる

のか。

問 なぜ范増はここまで沛公を恐れたのか。また、范増は何故沛公につかないのか。

問 項伯は項羽の叔父なのに、何故沛公と義兄弟の契りを結んだのか。

問 項伯が陣に戻ったとき、項羽は不審に思わなかったのか。

問 「従百余騎」で、どうして百騎ほどで出かけたのか。またその軍勢はどこにいたのか。

問 「至鴻門謝曰」で、沛公はどうして項羽に謝るのか。「小人」とは誰を指すのか。

問 項羽はどうして簡単に怒りを鎮めてしまったのか。また、なぜ密告者の名を教えたのか。

問 項王はなぜ黙ったまま応じなかったのか。また、范増は何故自分で行動せずに項莊に命じたのか。

問 「君王為人不忍」とあるが、項羽は残忍ではないのか。ただのお世辞なのか。

問 なぜ数の上では圧倒的に有利なのに「不者、若属皆且虜」といっているのか。

問 項伯はどうして殺気を感じ取れたのか。また、項羽はなぜ剣舞を許可したのか。

問 「与之同命」で、樊噲が運命を共にするといっているのはどういうことか。

問 「瞋目視項王」で、樊噲は項羽をにらんだが、こんなことをして大丈夫だと思ったのか。

問 どうして樊噲の代わりに張良が答えているのか。

問 「壯士」とあるが、なぜ項羽は気に入ってしまったのか。

問 「卮酒安足辞」とあるが、どうしてこんなことを言っているのか。

問 「毫毛不敢有所近」とあるが、これは事実であったのか。

問 「坐」とあるが、項羽はどうしてこれだけしか言わなかったのか。

問 項羽は沛公を厠にゆかせて逃げると思わなかったのか。

問 項羽はどうしてすぐに沛公を殺さなかったのか。

問 「項王使都尉陳平召沛公」とあるが、なぜ項羽は捜させたのか。また陳平は発見できなかったのか。

問 「拔劍撞而破之」とあるが、范増はなぜこんなことをしたのか。また、項羽はそれをとがめなかったのか。

問 「豎子」とは誰のことか。

問 「沛公至軍立誅殺曹無傷」とあるが、曹無傷はなぜ逃げなかったのか。

問 項羽はどうして子嬰を殺したのか。また、なぜ宮殿を焼いたのか。

問 「欲東帰」で何故項羽はこれほどまでに故郷にこだわるのか。

問 「四面楚歌」とは具体的にはどういうことなのか。また、これは作戦だったのか。

問 項羽はなぜ嘆いているのか。

問 「時不利兮騅不逝」で、どうして騅は進まないのか。

また、騅はどんな馬だったのか。

問 「田夫給」で、何故田夫は嘘をついたのか。

問 「有二十八騎」のときは、戦う気でいたのに、後で烏江を渡れば逃げられるというときに、それを放棄したのは何故か。

問 「必三勝之」と言っている項羽の真意は。

問 「何如」と言っているときの項羽の心理は。

問 「櫂船待」で、烏江の亭長は何故項羽が逃げて来るのを知っていたのか。

問 「大王急渡」とあるのに、どうして項羽は渡らなかったのか。

問 「乃自刎而死」で、項羽はなぜ逃げなかったのか。また、この時、沛公や范増は何をしていたのか。

〔時代背景や中国文化に関わる疑問〕

問 「吾令人望其氣、皆為竜虎成五采」とあるが、「氣」とは何なのか。また、「五采」とはどういう意味があるのか。

問 項伯は項羽の一番下の叔父、項梁は項羽の一番下の叔父、という矛盾は。

問 この座席の座り方に何か意味があるのか。

問 范増が玉玦を挙げた意味がよくわからないが、また、この目配せは沛公側に悟られなかったのか。また、何故范増はそこまで沛公を殺したいのか。

問 長寿の祈りとはどういうことなのか。

問 項羽の叔父である項伯が項莊から沛公を守って罪にならないのか。

問 「側其盾、以撞衛士仆地。」でこの動作はどういう動作なのか。また他には項羽の兵士がいなかったのか。

問 「賜之彘肩」とあるが、豚肉あるいは肩の肉ということに何か意味があるのか。

問 生肉を食べても平気なのか。

問 盾の上で生肉を切り裂いて食べるという行為は無礼で

はないのか。

問 「封侯之賞」とはどのようなことなのか。

問 「於是遂去」とあるが、張良や沛公はどうして簡単に

抜け出せたのか。また、敵陣に簡単に往来できたのか。

問 「楚人沐猴而冠耳」で楚人はどうしてこれほど馬鹿に

されているのか。

問 「虞美人」はこの後、どうなったのか。また、「美人」

の意味は。

## 五 考察

まず、疑問としては内容に関するものが圧倒的に多かった。活発に議論が開かれたのもこの内容に関する疑問点についてであった。これは、『項羽と劉邦』及び、漫画を読むことを義務としたため、内容に関してはある程度知識として頭に入っていたため自信をもって発言できたためと思われる。それと同時に項羽本紀の他の部分から容易に解答が得られるものがあったためとも考えられる。とくに「子嬰を宰相にした事情」や「范増と曹無傷との発言の食い違い」などではそれぞれ根拠となる事項を述べて活発な議論となった。また、生徒から出された意見も的を射ているものが多かったのも、内容に関する疑問点についてのもの

のであった。

次に、意見が出なかったものとしては、表現に関するもの、文化に関するものの中に多かった。これは、教授者自身の問題でもあるが、時代背景や文化についてはわからない点が多く、意見の述べようのないものが多かったためと思われる。ただし、教授者自身がわからないことを力説したためか、「項伯と項梁の一番下の叔父」という問題や「項羽と項王の言い替え」の問題については、逆に意見が多く提出された。また、こちらは生徒の意見としては、明らかに誤ったものも多く見られた。

以上から、内容に関しては教授者がほとんど関与せずとも、生徒自身で正解に到るものが多かったのに対し、とくに文化等に関するもので教授者自身が確信をもてないものに関しては、解答の導き方に工夫の必要を感じた。ともすると、強引に教授者の意見を述べてしまった点に反省する余地があるように思われるし、さらなる教材研究が必要であることも痛感させられた。

## 六 授業の展開

実際の授業での生徒とのやり取りを交えた主な例を以下に列挙する。「問」は生徒からの疑問点。「意見」はそれを

生徒に還元した時の生徒の意見。「答」は筆者がまとめとして生徒に示したものである。ただし、実際にはもっと多くの意見が提出されたり、教授者も様々なことに触れているが、ここでは割愛した。

問 「阮秦卒二十余万人」とあるが、そんなに大きい穴があったのか。

意見 司馬遼太郎『項羽と劉邦』では断崖から突き落したことになる。

意見 横山光輝の漫画でも断崖から突き落したことになる。

答 「阮」という漢字の意味には「生き埋めにして殺す」という説と、「崖から突き落して殺す」という説とがある。人数から考えて、ここは、「崖から突き落した」という方が妥当。

また、実際の黄土高原のほとんど垂直に近い切り立った断崖を見ても、「崖から突き落した」と考えるのがよいであろう。

問 二箇所ある「項羽大怒」で、それぞれ項羽は何故怒っているのか。

意見 最初のは、沛公が先に咸陽を破ったと聞いたから。意見 次ののは、沛公が秦の財宝を独り占めにしたから。

答 最初の「項羽大怒」——項羽は友軍であるはずの沛公が函谷関を封鎖して敵対し、しかも自分より先に咸陽を落したという情報に接したため。懐王との約束で先に咸陽を落したものが関中の王となるという取り決めがあったことを思い出す。

次の「項羽大怒」——沛公が関中の王となるうとしているという情報に接したためと、秦の財宝を独り占めにしたという情報に接したため。両方とも項羽自身が実現しなかったことである。

問 「使子嬰為相」とは具体的にはどういう意味なのか。

意見 沛公は心のやさしい人物であった。  
意見 そうではない。沛公は自分の子供すら車から捨てて平気であった。わからないが、別な理由だろう。

答 曹無傷の発言が事実だと仮定すると、後日、人心をつかむため、生かして位(宰相)につけたと考えられる。

司馬遼太郎の『項羽と劉邦』によれば、張良などの助言により、いずれは自国の民になるであろう秦の人民に敵愾心を持たせないための作戦との解釈もなされている。

また、『高祖本紀』によれば、沛公は寛容さを示すため子嬰を殺さなかったとする。さらに、子嬰は死装束で投降したため、死を覚悟して降伏の意を表している者を殺

せなかつたとも考えられる。

後の項羽の行動と比較するとよい。項羽は子嬰をすぐに処刑してしまった。これは、沛公たちのように先を読む能力がなかったということではない。それほど項羽は愚かではない。項羽にとっては秦は自国を滅ぼした憎い敵であると同時に、項羽の祖父の項燕・叔父の項梁を戦死させたかたきでもあったため、秦憎しという気持ちを上回っていたためであろう。

問 「吾令人望其氣、皆為龍虎、成五采」とあるが、「氣」とは何なのか。また「五采」とはどういうことなのか。

意見 出ず。

答 「氣」というのは難しくよくわからない。一種の生命エネルギーと考えていたらしい。古代中国の人々は天に起こる様々な変化・異常は地上の異変の前兆と考えた。その結果、「占星術・占風術・望氣術」などが盛んに行われた。

史記・天官書——項羽が鉅鹿に救援に向かった時、枉矢の星が西に流れた。その結果、項羽は山東で諸侯を服従させ、西進して秦兵を阮にし、咸陽を落とした。

軍隊には、占風・占星・望氣の専門家を随行させ、敵・味方の軍上の気を観測させた。

次に、五采とは修学旅行で高松塚古墳を訪れたグループもあると思うが、あそこの壁画に描かれた青竜（東・青）、白虎（西・白）、朱雀（南・赤）、玄武（北・黒）、皇帝（中央・黄）の五色がそうである。つまり五色とは、全宇宙を表している。その彩りが気にあるということは全宇宙を表している。その彩りが気にあるということは全宇宙の支配者となる人物だということである。

更に、竜や虎というのも皇帝の象徴たる動物であり、将来皇帝たりうる人物だということである。『項羽と劉邦』に出てくる項羽の母親の上に竜が蟠っていた話などもこういうことに基づいた挿話なのである。

問 項伯は項羽の一番下の叔父、項梁は項羽の一番下の叔父、という矛盾は。

意見 「季父」というのは複数いたのではないか。

意見 父方・母方のちがいではないか。

意見 項梁が一番下であったが、この時点では死亡している。項伯が一番下になったのである。

答 よくわからない部分である。

《複数説に対して》  
「辞源」——父之幼弟。「称谓録」——叔父之弟曰季父。季、癸也。甲乙之次、癸在下也。とあるので、これを信

じれば、おそらく一人を指すのであろう。ただし、複数  
いたという意見も尊重できる。

「史記索隱」——伯仲叔季、兄弟之次。故叔云叔父、季云  
季父。

《父方・母方説に対して》

母方は舅（母の昆弟）など異なる称である。

《結論》

「史記会注考証」——項伯、名纏、字伯、後封射陽侯。中  
井積徳曰、季而字伯、不知何縁故。とあるように、よく  
分からない。

問 「豎子」とは誰のことか。

意見 漫画では項羽を指している。

答 「豎子」とは青二才・小僧の意味で侮蔑の言葉である。

もし、直接項羽を指すとすると、この会話で項羽のこと  
を一方で「豎子」という侮蔑の言葉で表現し、一方で  
「項王」と尊敬の言葉で表現するという矛盾が生ずる。  
ここでは、直接的には劍舞にかこつけて沛公を殺せとい  
う范増の命令を実行できなかった項羽を指し、暗に沛公  
を殺す決断をしなかった項羽を指しているとするのが妥  
当。

問 途中で項羽という言い方から項王という言い方に変わ

っているのは何故か。

意見 単に言い換えているに過ぎない。

意見 司馬遷が記述した時期が異なっているのでは。

答 項羽本紀では項伯が沛公の攻撃命令を出した時点（鴻  
門之会の前）を境にして一部の例外を除いて、完全に項羽  
と項王とを使い分けている。したがって、単なる言い換  
えではない。『史記会注考証』には「梁玉繩曰、羽時亦  
未王、……似失史体」とあり、理由はよくわからないが、  
項羽の力が増大し、実質的に王と呼ぶに値する勢いを有  
したためと考えることもできる。

問 この座席の座り方に何か意味があるのか。

意見 項羽が一番上席、以下、范増・沛公・張良の順。

意見 范増が一番上席、以下、項羽・沛公・張良の順。

意見 項羽が一番上席、以下、沛公・范増・張良の順。

答 二説ある。

1 范増の位置を最上位とし、以下、項羽・沛公・張良の  
順。「天子南面」ということから。

2 項羽の位置を最上位とし、以下、范増・沛公・張良の  
順。

宮殿において殿上と殿下との関係の場合は、1にな  
り、北側が最上位になる。平地においては西側が最上位

となる。

ここは、宿營地のことであり、宮殿ではないので、2の説が妥当であると考えられる。

いずれにしろ、本来なら客人である沛公にとっては、極めて屈辱的な座席配置である。恐らく范増の差し金で、沛公が激怒するようなら、それにかこつけて抹殺しようともくろんだと思われる。

問 「賜之彘肩」とあるが、豚肉あるいは肩の肉ということに何か意味があるのか。また、どうして肉など出したのか。豚の生肉を食べても平気なのか。

意見 項羽は樊噲が気に入ったためごちそうを与えた。

意見 肩の肉は今で言うロースで上等の肉であった。

意見 当時は人々は生肉を食べるのが習慣であった。

意見 項羽は樊噲の度胸を試すために危ない生肉を出した。

答 当時は、豚・羊・牛のどれか一つでも食卓にのぼればご馳走であった。すなわち、項羽は樊噲を優遇していることになる（それぐらい気に入った）。また、肩の肉は豚肉の中でも高級な部分である。豚の生肉は恐らく当時としても避けたはずである。

『韓非子』に燧人氏が火を起こすことを人々に教えてか

ら、生のものを食べて人々がお腹をこわすことがなくなつた、とあり、項羽の当時も特に豚の生肉は避けたはずである。意見の通り、樊噲の度胸を試すためということが考えられる。

問 「於是遂去」とあるが、張良や沛公はどうして簡単に抜け出せたのか。また、敵陣に簡単に往來できたのか。意見 出す。

答 城のようなものがあつたわけではない。山を背にして陣營を敷いていたと思われる。野營地であるから、簡単な柵はあつただろうが、簡単に抜け出られたはず。山を越すと沛公の陣營への近道となり、また山の中なので捜しても紛れて簡単には見つからない。ちなみに、鴻門と霸王との距離は四十里（約十六キロメートル）、近道をとれば、二十里（約八キロメートル）である。

問 「楚人沐猴而冠耳」で楚人はどうしてこれほど馬鹿にされているのか。

意見 項羽が意見を全く受け付けないので腹をたてたため。

答 当時は、中原の諸国から見ると、楚は南方の野蛮な国という認識しかなかった。恐らく、方言なども手伝って、全く風俗の異なる未開の民という意識であつたは

ず。また、ここでの「楚人」は意見のとおり、項羽に対する皮肉と考えてよい。

問 虞美人はこの後、どうなったのか。また、「美人」の意味は。

意見 出ず。

答 史記で虞美人が登場するのはこの箇所だけである。虞美人なる人物がどのような人物であるかは全くわからない。「美人」は後に女官の階級名になるが、この時あつたかどうかは不明。二説ある。

2 「美人」という官位の女性。

1 と考えておく。また、虞美人がこの後どうなったかは不明。一般には、足手まといになるのを嫌って自害したとする。項羽に殺されたと想像するものもある。

さらに、『漢書』項籍伝に虞を姓とするのに基づいて、極端な意見として項羽の息子とすることもできると考えるものまである。

問 「人方為刀俎、我為魚肉」の意味がよくわからないが、意見 訳のプリントにもあるように、「人」は項羽側を「我」は沛公側を示し、「刀俎」は殺す側、「魚肉」は殺される側である。

答 司馬遷の巧みな比喻を味わうべきである。すなわち料理をする側が、「項羽側・刀俎」であり、料理される側が、「沛公側・魚肉」である。項羽側はいつでも沛公側を殺せる立場にいるということ。

問 「沛公至軍立誅殺曹無傷」とあるが、曹無傷はなぜ逃げなかったのか。

意見 自分の名前がばれているとは思っていなかった。

答 曹無傷の思惑をとらえてみるとよい。前にも説明したとおり、曹無傷はこのまま沛公側については、項羽に攻められ、自分も命を落とす確率が高くなり、また、左司馬という地位に不満があつたため、項羽側に寝返つて、もっと高い地位を得ようともくろんだのである。そしてこの時点では、密告者の名を項羽が明かすとは思っていなかったろうし、沛公が無事に戻つて来るとも思っていないはず。

問 「火三月不滅」で、こんなことがあるのか。また、「殺数十百人」とあるが、一人でこんなに殺せたのか。

意見 出ず。

答 劇的效果を高めるための誇張表現であろう。また、本文に多用されている、数字の効果的使用法にも着目すべきである。

問 「時不利兮驩不逝」で、どうして驩は進まないのか。

また、驩はどんな馬だったのか。

意見 驩はへとへとに疲れていた。

答 この詩は味わうべきである。項羽自身の悲しさを一切表現せずに、その悲しさを十全に表現し得ていることを理解すべき。原文のプリントの4ページに「吾此の馬に騎ること五歳、当たる所敵無し。嘗て一日に行くこと千里なり」とあることでもわかるように、驩は名馬中の名馬であった。馬は乗り手の気持ちを敏感に感じ取るといわれる。ここは、驩が乗り手である項羽の諦めの気持ちを感じ取ったと考えられる。また、驩自身も連戦につぐ連戦で疲れきっていたためとも考えられる。

問 「項王笑曰」とあるが、この「笑い」はどのような笑いか。

意見 投げやりの笑い。

意見 自嘲の笑い。

答 漢文で「笑」の字が登場したら注意すべき。その登場

人物の心理を裏によく表しているからである。

「史記・刺客伝」——軻自知事不就、倚柱而笑、

「史記・淮陰侯伝」——信出門笑曰、生乃与噲等為伍。

明るくげらげら笑う場合はほとんどなく、何か陰翳を感じ

じさせる笑が多い。田中謙二著『史記の笑い』によれば、「へ笑い」は、それが歓喜のであるにせよ、自嘲のであるにせよ、みな「笑う」主体の心理を投影するもの」とあり、この場合も、主体である項羽が自身の運命を悟り、自嘲的に笑ったと見ることがができる。ただし、同書によれば、「亭長の好意を感謝するへ愛想笑い」の要素を含む」としている。また、自分の運命を悟りきった笑いと考えることもできる。

以上、示したのが実際の授業での生徒とのやりとりの一例である。以下、補足説明をする。

1 解釈は行わないが、授業の初めに必ず音読を行った。その際に、質疑応答では触れ得ない、重要文法事項等についてはとくに時間を割いて説明を行った。

2 生徒とのやりとりは、時間の関係ですべてを扱えないので、こだわりたい部分のみを取り上げた。やりとりを行わなかった疑問点については、生徒に答えさせるか、教授者が答えを与えてしまった。

3 生徒からの意見は板書し、その可否を吟味しつつ議論させた。そして、最後に教授者が答えが明確なものについては、答えを示し明確でないものについては、教授者の意見と断った上で、答えを示した。

## 七 反省

以下、授業を実際に行ってみて、ねらいが成就できたか、また、問題点はということについて述べる。

へねらいについて

ねらい1 生徒を積極的に授業に参加させる

これについては、ほぼ成就できたと判断できる。生徒に感想を求めても、自分達の疑問を授業で取り上げるのに興味を持てた、議論が白熱して面白かった等の好意的な意見が多かった。ただし、『項羽と劉邦』や漫画も読まず、さらに口語訳のプリントも読まないという生徒が少数ながらも存在したのは残念であった。授業中は聞いているものの、議論の輪には加われないでいた。このよ

うな生徒をどう扱うかが問題点として残る。

ねらい2 疑問に思った点を疑問のままにさせない

これについてもほぼ成就できた。ほんの一部ではあるが、読み進めていくうちに新たな疑問点を見だし、授業中に質問として提出する者もいた。

ねらい3 その教材を深読みする経験を持たせる

これについては少々不十分であった。一応余裕があれば、『史記』項羽本紀の注釈書等も参考にするよう指示

はしたが、それを行った者はいなかった。ほとんどの生徒が『項羽と劉邦』を論拠として議論を行っていた。また、『項羽と劉邦』自体の読みも、かなり丹念に読んできた者と一通りの読み方しかしてこない者が存在して理解の程度に大きな差を生じてしまった。ただし、丹念に読んできた者にとっては自分の意見を披瀝し活躍する場が多く、嬉々として授業に臨んでいた。

### 問題点

1 今年度は二年生4クラスにこの授業を行ったが、クラスにより活発な議論になるところと、沈滞気味のところがあ

り、沈滞気味のクラスにはかなり教授者の方でテ

コ入れしなければならなかった。

2 『項羽と劉邦』を読むことを課したためか、議論の中でこれに引きずられる傾向が顕著で、あくまでも小説であるという意識が薄くなってしまった。したがって、『史記』本来のものからはずれてしまうことも間々あった。

3 少々長期に亘る授業となるため、生徒の中には厭けを生じた者が少なからず存在した。

4 教授者自身がよくわからない箇所については、明確な答えを示唆できず、とくによく読んできている生徒にと

つては欲求不満状態にさせてしまった。

## 八 おわりに

何か、生徒の興味を喚起する授業をというところで行った授業であるが、実際の生徒の反応はまずまずといったところである。生徒の意見も対立したときなどは、互いに自説を主張して盛り上がりを見せることもあった。そういう意味では授業を行う立場としても、大変面白く、また考えさせられることも多かった。

ただし、夏休みの課題として与えた『項羽と劉邦』を読んでいない生徒や、せっかく与えた口語訳のプリントすら読まない生徒がいることも事実である。こういった生徒は授業での議論にも加われず、つまらなそうにしていた。大半の生徒は、後に感想を聞いても面白かったという評価であるが、授業に乗り切れない生徒をどうするかは問題として残る。

以上は、つたない実践例をまとめたものである。特に、解答を生徒に与えながらも、自分自身が調べきれっていない点、よくわからない点などが多々あったが、生徒からの疑問点に対する筆者の解答でおかしな点・不明な箇所の解答があったら、ぜひ御教示願いたい。